追悼　山口巖先生

ロシア・ソビエト言語学との二度のであい

まつもと　ひろたけ

山口先生にはじめて対面したのは、類型学研究会の例会で、その後ももっぱら例会とそのあとの懇親会をとおしてのつながりだった。ひととのであいは、わたしにとって大体著書とのであいにはじまる。山口先生とのであいも『類型学序説－ロシア・ソヴエト言語研究の貢献』のほうがはやかった。ただ、当時編集を分担していた『国文学・解釈と鑑賞』の新刊紹介にとりあげたきっかけはおもいだせない。その後、まだ日ソづとめだった越智誠一さんが拙宅にたちよったおり、類型学研究会のはなしがでたのだとおもう。

ロシア・ソビエト言語学は、日本へは、とりわけ日本語研究にはあまりはいってきていない。そういうなかだが、言語学研究会に参加したわたしは、もうひとり先生とよべる奥田靖雄にロシア語をまなばされて、ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフや 1954 年版のアカデミー文法からはじまって、ソビエト言語学の論文をよむようになった。言語学研究会の前身の民科時代の、スターリン言語学やその紹介の論文などでのマール批判が印象にあったり、日本語研究のポリヴァーノフがマール主義者の迫害をうけていたということをきいていたりしたせいか、マールはもちろん、メシチャニーノフでさえも、その後のソビエト言語学とは無関係のようにかんがえていた。

その後、琉球方言の文法記述の模索のなかで、クリモフの著作に接した。これもいきさつがおもいだせず、縁としかいいようがない。山口先生や類型学研究会との縁をさかのぼればクリモフになる。そしてクリモフにはじまるつながりは縁というより必然だったようにも感じる。

奥田からメシチャニーノフやクリモフのことを直接きいた記憶はない。ただ、カツネリソンの著作は奥田にすすめられて言語学研究会でよみあわせをしたことがある。そのなかにはメシチャニーノフの名が副題にでてくるものもあったが、ボチェブニャーをめぐるカツネリソンとヴィノグラードフの激論（石田訳『内容類型学の原理』訳者あとがき）などまるでしらず、奥田さんがすすめるのだからカツネリソンもヴィノグラードフもおなじようにかんがえていた。もっとも、ソビエトから来日した言語学者をかこんで、言語学研究会メンバーが質疑したとき、奥田が突然、ヴィノグラードフはスターリニス

トかとたずねたことがあった。スターリンーヴィノグラードフとマールーメシチャニーノフーカツネリソンというふたつのながれを、奥田は意識していたからの質問ではなかったかと、山口先生や類型学研究会とのつながりができてからはかんがえている。

クリモフの本をよんでいると、一度ならずクリモフはヴィノグラードフを好意的に紹介している。具体的には文法に対する語彙の、また形態に対すると統語の優位という、言語の諸レベルのあいだの相関である。内容と形式の対立と統一において、内容を優位におくロシアーソビエト言語学のよき伝統はヴィノグラードフもクリモフもわがものとしているといっていい。

言語研究以外のことでも、山口先生にであえたという実感がのこっている。先生が、ソウルでの少年時代や学生時代の勉学のことをたのしそうにかたられていたことをおもいだす。松平千秋教授にギリシア語をまなびはじめたときのおもいでは、4，5 回はきいている。

京都のこともいろいろおそわった。類型研のおり、コープのやどにとまることがあったが、構内にやしろののこっているのがめずらしくて、それをおはなしすると、コープイン京都をたてるとき、先生もかかわっていたことや、小祠の由来をおしえてくれた。また、類型研が京都大でひらかれて、碁盤の目のような京都のまちにめずらしい北東方向のななめのみちをとおったことがあったときは、そのみちのことをかたってくれた。

類型学研究会にわたしがでるようになってからの山口先生は、研究会ではとてもお元気だったが、ときどき入院されたりして、体調がかならずしも万全ではないようにみえた。しかし健康に関する愚痴に類した発言はきいたことがない。健康診断をうけにいくだけで気分的にめいる人間からみると、さっそうと入院したり退院されたりしていた。京大病院もいまは老人科のようなのができて便利になったなどと、気楽にはなされておられた。

その先生から突然、類型学研究会を退会するとつたえられたときはおどろいた。先生の体調のこともおもいうかんだが、退会宣言のすぐまえくらいの時期に、山口先生は、類型学がクリモフで完結しているわけではないという意味の、よくかんがえれば当然ながら、わたしなどをハッとさせる発言をされていたからで、そのつづきを具体的にききたいとおもっていたら退会の通知である。大変がっかりしたが、山口先生のいわれたことは、類型学研究会のメンバーが集団で、また個人で探求していくほかないと、いまはおもう。あらためてご冥福をおいのりする。